

手話には音がある?

世界には、約 6900 の言語があるといわれています。各国の手話もその一つです。その手話には「音」がある、という意外に思うかもしれません。音、ここでいう音韻は言語に必ず存在するルールの一つです。

例えば「秋」という言葉を日本語の音韻で考えてみます。秋は「aki (あき)」と表します (図1①)。これを最も小さく分けた場合



図1

① 秋 (あき)



③

a k i

a k a 赤

(あか)



②

a k i

a n i 兄

(あに)



t a k i 滝

(たき)



音の最小単位 (音素)

「a」「k」「i」となります (図1②)。これが音素です。音素は、言葉の違いを区別することができる最小の単位であり、「a」も「k」も「i」もそれぞれは意味を持ちません。しかし、これらが組み合わせると意味のある言葉になり、さらにどれかが変わると違う意味の言葉にもなります。「i」だけが「a」に変わると「赤: a k a」になり、「k」だけが「n」に変わると「兄: a n i」になります。「t」が言葉の初めにつくと「滝: t a k i」のようにもなります (図1③)。

図2

① 秋 (あき)



③

手形 位置 運動

↓ ↓ ?

(少し動して2回ほど)

②

↓ ↓ ↓

↑ ↓ ?

(手前の方で交互に)

音の最小単位 (音素)

↑ ↓ ?

(片方は手前、もう片方は奥へ)

「秋」と同じ手形で
位置と動きが違う
手話を考えよう

手話ではどうでしょうか。手話の単語で秋は・・・お分かりですね。これを細かく分けていき、言葉の違いを区別してそれぞれは意味を持たない最小の単位を探

していくと、「手形」「位置」「運動」の3要素^(※)が出てきます(図2①)。これが手話の音素です。手形はパーの形の手のひらを前にして向かい合わせ、胸のやや上(首)辺りの位置から、2回前方から手前に動かします(図2②)。秋の手話の手形のみそのままにし、位置や運動だけを変えるとどうなるでしょうか(図2③)。



顔の前あたりで2回ぐらい大きめに上下に動かすと「映画」、胸の前あたりで交互に小刻みに動かすと「嬉しい」、胸の前あたりで左手を左から右、右手を右から左に交差させるように動かすと「交通」というように、それぞれ手の形は同じでも、位置や運動が変わることで別の言葉になります。手話が音韻を持つということは、手話が一定の決まりを持った言語であるという証拠でもあります。

この手話の音素のような音韻的側面他、基本語順がSVO型であること(日本語と同じ)やNMM(ノン・マニュアル・マーカーズ)と呼ばれる顔や頭の動き、手話口形(マウス・ジェスチャー)などの文法的側面、CL(クラシファー: 類別詞)表現の多さといった語彙に関して特徴や一定のルールがあり、これらは、日本手話が言語であるという要素として挙げることができます。

※ 手話の音素自体を、手のひらの向きを加えて4つとする考え方もあります。

この記事を作成するにあたり、第27回全国聴覚障害教職員シンポジウムでの講義資料(国立リハビリテーション学院 野口岳史先生)と、財団法人日本英語検定協会のサイト内にある「英語をもっと楽しく」のページ、書籍「日本手話のしくみ(岡典栄・赤堀仁美著 大修館書店)」「手話言語学の基礎(松岡和美著 くらしお出版)」を参考にしました。図表に用いたイラストは、愛媛スクールネットの教材用イラスト素材及びフリー素材のサイトであるパブリックドメインQのものを使用しています。

「人工内耳教育セミナー2019 in 大阪」の御案内

テーマ 『幼小児期の人工内耳装用児の指導と課題』

- 日 時: 2019年2月10日(日)12時から 2月11日(祝)13時まで
 会 場: 大阪教育大学天王寺キャンパス 西館 第5講義室
 対 象: 聴覚障がい教育及びリハビリテーションに関わる学校・学級・施設等の教職員及び病院等で小児の(リ)ハビリテーションに関わる言語聴覚士
 定 員: 70名程度
 受 講 料: 無料(但し、資料代2,000円を当日に徴収)

申込方法: 受講希望者の所属、氏名、連絡用電話番号、メールアドレスを記入の上、メールにて申し込む。 申込メールアドレス: ciseminar2019@yahoo.co.jp

(問い合わせ電話番号): 089-993-5489 (直) 鷹の子病院でんでんむし教室(高橋)

担当者の研修メモから

「吃音」から「難聴」を考える

先日、ニュースサイト（毎日 j p : 11月19日配信記事）で「吃音を理由にいじめ」の記事を見つけました。記事には、吃音によって周囲からの嘲笑が続いていたこと、社会には吃音を「あがり症」程度に考え、偏見があるということ等が記されていました。

この夏、みみちゃん担当者は、宇和特別支援学校聴覚障がい部門で行われた特別支援教育研修会に参加しました。テーマは「吃音」です。医師であり吃音の当事者でもあるという、旭川荘南愛媛病院の岡部健一先生のお話をおうかがいしました。旭川荘南愛媛病院は、全国で5か所しかない「吃音相談」を行っているところで、岡部先生は、その開設に尽力され、現在は院長も務めておられます。岡部先生のお話から、吃音に対する基本的な知識を学び、吃音が誤解されやすいものなのだとことを知りました。そして、吃音のある子供の悩みや支援の在り方は、軽・中等度の聴覚障がいのある子供の悩みや支援の在り方にも通じる部分があると感じました。以下、私なりにまとめてみました。

吃音（どもり）とは、「言葉が滑らかに出てこないこと」です。主な症状として、連発（言葉の一部を繰り返す）・伸発（言葉の一部を引き伸ばす）・難発（言葉が出るのに時間がかかる）と、これに伴う随伴症状があり、次のような特徴があります。

- ① 吃音のある人は、およそ100人に1人ぐらいいる
吃音自体は、5%の子供に発症し、成人の段階では1%の人に残る。
- ② 人により、言葉の出にくさが違う
学校行事、生活場面（相手）によって変わる。
- ③ 発症の原因は、特定されていない
本人の性格や保護者の育児方法は関係ないことははっきりしている。
- ④ 吃音の状態には「波（調子の良し悪し）」がある
同じことばでも、いえるときといえないときがある。
- ⑤ 治療法は、まだ確立されていない
軽減法として、本人への指導支援と、環境整備の両方が必要である。

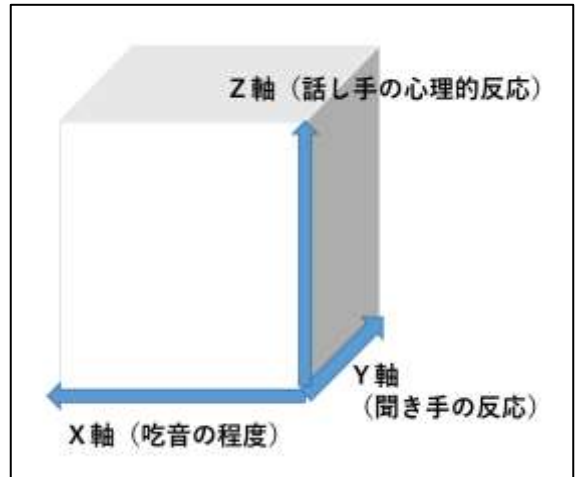
吃音のしんどさは、**どもることそのものではなく、どもることが周囲から「悪い」こと（嘲笑の対象となること）とされ、どもりたくないために、不安になったり隠そうとしたりしてうまくいかずに落ち込むという悪循環になること**です。こうしたことから、およそ半分の吃音者に対人恐怖症（SAD：社交不安障害）があるという報告や、20年前に比べ中学生の不登校の割合が増加しているという報告もあり、冒頭のいじめの記事が珍しいケースではないことがうかがえます。また、吃音の症状が進むと隠したり話すことを避けたりするため、周囲から見れば心配ないように見えますが、本人の悩みは大きくなります。これも吃音が理解されにくい一因です。

吃音は、**症状の重さと本人の生活上の困り感が必ずしも比例しない**という点において、軽・中等度難聴と共通する部分があるように感じます。このことを説明する場合、よく用いられるのが「ウェンデル・ジョンソンの吃音立方体モデル」です。

モデルは、X、Y、Zの3つの軸で構成される立方体で示され、立方体の大きさは、生活上の困難さを表します。吃音の状態が軽い（X軸が短い）場合でも、周囲の人の態度が真似をしたりからかったりといった不適切な（Y軸が長い）場合や、それ

を見た本人の不安や悩みが増大する（Z軸が長い）場合は、生活する上での問題は少なくなく、逆に吃音の状態が厳しくても、周囲の理解があったり、本人の気持が安定していたりすれば、大きな生活上の困難さは生じない、といえます。

軽・中等度難聴は、障がいの状態そのものは、確かに重度の難聴に比べると「大したことはない」のですが、だからといって**生活上の困難さも「大したことはない」というわけではない**と思います。一方で、すべての軽・中等度の難聴の子供が困難さを抱え、支援を求めているわけではないですし、そうした状態がずっと続くわけでもなく、その人の**環境や考え方の変化により、成長するにつれ（立方体の形が）変わる**ことが考えられます。



吃音がある児童生徒への具体的な支援については、ことばの先取りをしないとか、

吃音のことを…	(選択肢)
友達に伝えるか?	伝える・伝えない
だれに	クラス内・学年・親しい人・一緒の部活の人
だれが	自分・先生・その他
先生には?	伝える (先生) ・伝えない
どんな場面で	自分がいるとき・いないとき
どんな内容を	()

話し終えるまでゆっくり待つといった基本的な姿勢の他に、東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会では「吃音話し合いシート」を用いた方法を紹介しています。みみちゃん担当者が注目したのは「伝え方」です。教員が「こうすべきだ」と決めてしまうのではなく、本人の**「して欲しいこと」**を十分にくみ取りな

がら、伝え手や相手、場面など様々な方法があることを示し、**本人、保護者、学校間で具体的にどうするか話し合いをする必要**があります。この流れが「合理的配慮」でもあります。そしてこのことは、軽・中等度、あるいは重度の聴覚障がい児に対しても、同じことがいえると思います。本人に関わる教員や支援者はこのことを常に気に留め、本人の生活の困難さを解消していく必要があると感じました。

この記事は、平成30年8月21日に宇和特別支援学校聴覚障がい部門で行われた岡部健一先生の講演資料の他に、東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会HP及びリーフレット、書籍「吃音のリスクマネジメント（菊池良和著・学苑社）」を参考にして作成しました。また、「吃音話し合いシート」の「伝え方」の表は、オリジナルのものを少し変えて作成しています。

編集後記 「日本手話」の記事は、全国聴覚障害教職員シンポジウムでの手話言語に関する研修報告をするつもりでしたが、途中で手話の言語としての決まりがどうなっているのかを説明しないと先に進まないことに気付き、研修報告を止めて、決まりのうち音韻の部分に絞り、私なりに説明を試みた次第です。このシンポジウムは、全国の聴覚障がいのある教職員が集まり研修や意見交換を行う会で、聞こえる先生方もスタッフとして多数関わっているのに、終始静かで、手話があちこちで行きかう独特の雰囲気での研修会でした。

「吃音」は、担当者が教育相談の業務に携わっていた頃、何人かの方から相談を受けたことがあります。御本人や御家族の様々な想いを感じつつも、なかなか良い支援できなかったことを覚えています。吃音の「伝え方」に注目したのは、最近、軽・中等度難聴の人が、障がいについてカミングアウトをすることを、本人からではなく先生から提案されるという場合があるということを知り、個人的に違和感を持っていたからです。障がいのカミングアウトはかなりのリスクを伴う行為であると思います。支援者なら、「こうすべきだ」ではなく、いろいろな選択肢を本人や保護者に伝え、より良い方法を一緒に考える姿勢が必要でしょう。